

【連載】

日中学術交流の現場から 第2回

仮面ライダーと市民科学

—市民科学にとって仮面ライダーとは何か—

山口 直樹（北京日本人学術交流会責任者）

はじめに

石ノ森章太郎原作による異形のヒーロー、仮面ライダーが、誕生するのは1971年4月3日のことであった。このヒーローは、たちまち人気を博し、社会現象にまでなる。

当時の子供たちは、スポンサーのカルビーが発売していたスナック菓子についていた仮面ライダーカードほしさに群がっていた。そのなかでカードだけ入手してスナック菓子は、捨ててしまう子供が続出し、社会問題にもなっていた。

当時少年だった人で“変身”ポーズをしたことがない少年を探すことは難しいであろう。それだけの影響力を有したこの作品は、『仮面ライダーV3』（1973）『仮面ライダーX』（1974）『仮面ライダーアマゾン』（1974）そして『仮面ライダーストロンガー』（1975）など続編が次々と制作され、平成仮面ライダーの一連の作品に続いていくこととなった。

中国においては、仮面ライダーは、ウルトラマンほどではないが、假面超人あるいは假面騎士と表記され一定の知名度を有する。しかし、仮面ライダーをウルトラマンのような宇宙人だと誤解している中国人も少なくない。実際、石森章太郎『仮面ライダー』第一話では、「私は、遊星から飛来した宇宙人と思えるかもしれない」というセリフがあった。

1. 改造人間としての仮面ライダー

だが、仮面ライダーは、宇宙人ではなく改造人間である。当然ながらこのことを押さえておくことは重要である。ウルトラマンのように地球の外部からくるヒーローに対し、仮面ライダーは、地球の内部から現れたヒーローという意味を持つからである。

1971年4月3日にテレビ放送された第一話は、城北大学の知力と体力に優れた青年科学者、本郷猛(演：藤岡弘)が世界征服を狙う悪の秘密組織ショッカーに改造されるところから始まる。(ショッカーの思想は基本的に超エリート主義であり選民思想である。少数支配による人類の改造と再編成が、ショッカーの基本戦略である。)

本郷猛は、IQ600という設定であり、抜きん出た知力の持ち主である。ショッカーはそこに目を付けたのだ。

『仮面ライダー』(第一巻)(秋田書店,1971)においては、以下のようなやり取りがなされる場面がある。

ショッカーの首領「めざめよ本郷猛、栄光あるショッカーの一員に選ばれしものよ。

世界のあらゆるところに組織を持ちその国の選ばれた者のみを組織に加える。やがてはほかの無能なる人間どもは、家畜のごとく「ショッカー」の意のままに動くことになる。」

本郷猛「ば、ばかな！人間はすべて平等だ。これからの世界には“人類愛”こそ必要な時だというのに、それを家畜のように支配するなんてばくはごめんだ。」

ショッカーの首領「くくく、もう遅いのだ。本郷、君はすでに首までショッカーの一員になってしまっている。

お前が意識を失ってからすでに一週間、その間にショッカーの科学者グループは、おまえの肉体に改造手術を施した。おまえはいまや改造人間なのだ。サイボーグが世界を動かし、そのサイボーグをこの私が支配する。」

本郷猛「死んでも貴様らの思い通りに動く人間にはならないぞ。」

ショッカーの科学者「そう思うのは今のうちだけだ。最初は皆がそのように言う。だが、やがてはショッカーに感謝するようになる。」

この場面からもショッカーが、いかに恐ろしい組織であることがうかがえる。

ここで本郷猛が、抜きん出た知力と体力の持ち主であるにもかかわらず、「人間は平等だ。」と述べているところが、印象深い。

たとえば、岡謙二は、『不滅のヒーロー仮面ライダー伝説』(ソニーマガジズ,1999)においてショッカーについて以下のように述べている。

ショッカーは、世界制覇を企てる悪の秘密結社である。ナチスドイツが、秘密裏に研究していたとされる改造手術を人間に適用し、一方で仮面ライダーを誕生させ、もう一方で仮面

ライダーとたたかう怪人を誕生させる。ショッカーは世界各地で作戦を成功させつつあったが、唯一取り残されていたショッカーの支配下におくための作戦を遂行しようとする。このショッカーを「現代文明」と読み替えると、仮面ライダーはその文明の負の部分を負いながらも、さらに悪化する環境汚染や人間の精神的荒廃と戦う孤高の戦士であり、ショッカーの怪人たちは、これまでの過ちへの反省もなく、さらに環境汚染や精神的荒廃にさらに荷担しようとする「利己的利益追求型」の政財界のリーダーたちとみることにも可能だ。なお怪人にはもともとショッカーの軍団員だった者、あらたに人間を怪人に改造したものに大別できる。怪人たちは、基本的に動植物がもとになり、怪奇性が強い。(220頁)

ショッカーはナチスに似た組織として描かれるが、ナチスと対決しようとした哲学者にフランクフルト学派のアドルノやホルクハイマーがいる。

彼らは『啓蒙の弁証法』(1944)において啓蒙の過程が、「自然の支配」の歴史だとすれば、技術によって「外なる自然」をそして道徳によって「内なる自然」を支配することが啓蒙の中に含まれており、この過程で啓蒙は神話となり文明は野蛮に反転すると考えた。

ショッカーは、道徳によってではなく、脳手術で「内なる自然」である人間の精神を支配しようとする野蛮な組織なのだが、本郷猛は、脳手術される直前にショッカーの基地から恩師、緑川博士の助けを得て脱出し、組織を裏切ることになる。

そして、ごく少数の理解者である「おやっさん」こと立花藤兵衛(演：小林昭二)や緑川博士の娘、緑川ルリ子らとともに人間の自由と平和のために闘うというのが仮面ライダーという物語である。

ここにおける第一のポイントは、仮面ライダーは、悪の組織ショッカーによって改造された改造人間であるということである。仮面ライダーの超人的な能力は、悪の組織ショッカーのテクノロジーによって開発されており、後に送り込まれてくるさまざまなショッカーの怪人と同様、もし脳手術の前に脱出していなければ、怪人バッタ男あるいは、怪人トンボ男などとショッカーの尖兵として「活躍」して人間の自由と平和に敵対していただろう。

仮面ライダーの身体には、悪の組織ショッカーのテクノロジーが、刻み込まれているのだ。



<https://www.phileweb.com/news/hobby/201909/10/2578.html> より引用

2. 裏切りの物語としての仮面ライダー

2-1. 仮面ライダーの物語の構造

悪の組織ショッカーを裏切ることによってこそ痛みを背負った孤独な正義のヒーロー、仮面ライダーは誕生する。仮面ライダーとは「悪から与えられた力を使って悪と戦う物語」であるといっていよう。この物語の構造は、石ノ森章太郎『人造人間キカイダー』(1972)『サイボーグ009』(1964)『アクマイザー3』(1975)などにおいても同様である。悪の組織ダークを裏切ることによってキカイダーは誕生したし、悪の組織ブラックゴーストを裏切ることによってサイボーグ009は誕生した。アクマイザー3もまた悪魔族をザビタンが、裏切る物語である。(石ノ森章太郎氏のアシスタントをつとめたこともある弟子筋にあたる永井豪氏の『デビルマン』もまたデーモン族を裏切る裏切りの物語であり、基本的に仮面ライダーと同じ物語の構造をもっている。)

石ノ森章太郎は、生涯にわたってこの組織を裏切るヒーローの物語を数多く描きつづけた。このことは何を意味するのか。

第二のポイントは、一般の人々は悪の組織ショッカーの正体を知らず、またウルトラマンにでてくる「科学特捜隊」や「ウルトラ警備隊」のような公的な組織も仮面ライダーには、ほとんど登場しないということである。

岡謙二は、『不滅のヒーロー仮面ライダー伝説』(ソニーマガジンズ,1999)においてウルトラマンと仮面ライダーの科学思想の差異を以下のように指摘していた。

仮面ライダーの思想性は、ウルトラマンとの比較で言えば“科学”という点に絞って考えてもまったく異なる。ウルトラマンでは、科学は正義の側が使用して人類の進歩に貢献するものであるという一点は、どんなシリーズにあっても不変に定理だったように思う。

実際、国際科学警察機構日本支部である「科学特捜隊」というネーミングを見ただけでそれはわかることだ。彼らは現代の科学を駆使し、さらにウルトラマンの持つ超ハイテクノロジーの助けを借りて人類を守るのである。

だが、仮面ライダーにおいては、科学は怪人、つまり悪の側が最大限に活用して人類を滅ぼそうとするものであり、本郷らがそのショッカーの軍団の最先端のハイテクノロジーによって改造されるなど、科学のもつ“負の部分”が強く押し出されていたといっていよう。

(276頁)

悪の組織ショッカーによるテクノロジーによって改造された身体を使ってショッカーを倒すところに仮面ライダーという物語の最大の特徴が存在する。



<https://ameblo.jp/miitake0319/entry-12549574331.html> より引用

また、岡謙治は次のようにも言う。

今日、私たちは、科学は万能ではありえず、科学による人類の進歩、発展はというのはひょっとすると幻想かもしれないと感じ始めているが、最先端科学で武装された“悪の軍団”ショッカーが登場したことは、そうした私たちの感覚をあらかじめ先取りしていたとさえいえるだろう。

したがって、仮面ライダーは、科学は人類の進歩のためにあるといったそれまでの楽観主義的な“思想”を大きく乗り越え、時代に警鐘を打ち鳴らすものでもあったとさえいえるのである。

もちろん仮面ライダーの側もまた、最先端科学を駆使したスーパーマシン、サイクロンを使って悪と戦うわけだから結局、そこには科学の持つ善悪の側面が描かれ「誰がなんのために科学を用いるのか」が問われていたともいえる。いずれにせよ仮面ライダーは、超ハイテクノロジーを駆使して人間を葬り去ろうとする悪の軍団と真正面から闘う人間の物語である。(277 頁)

「誰が何のために科学を用いるのか」が問われていたともいえるという指摘は、忘れられてはならない。仮面ライダーである本郷猛のごく少数の理解者である「おやっさん」立花藤兵衛(小林昭二)は、バイク屋やスポーツ用品店の店主という一民間人であった。仮面ライダーは、こうした民間人の協力を得て悪の組織ショッカーと戦っていたのであった。仮面ライダーは、官ではなく徹底して民の存在なのである。しばしば NPO といいながら実際は、官の組織の人間が理事の大半を占めているというような組織を見かけるが、仮面ライダーやそれを支える者たちは、民を装いながら実際は官というような組織の者たちとはおおよそ異なっている。

ここにおいてキーとなる存在は、仮面ライダーの理解者である一民間人の「おやっさん」の存在である。仮面ライダーは、「おやっさん」をはじめとする市井の市民たちの支えによって仮面ライダーとして、活動できている。市民の側が、ショッカーに対抗するために科学

を用いているともいえる。

この点において仮面ライダーは、市民科学と親和的なのである。

また、青年科学者、本郷猛は、市民科学者といってよいかもしれない存在である。

2-2. 仮面ライダーとゴジラの共通性

第三のポイントは、仮面ライダーは、バッタをモデルとしており、自然の象徴であり、風力エネルギー(原子力エネルギーなのではない)をもとにして活動しているということである。

仮面ライダーは、漫画連載とテレビ放送が同時に始まっているが、石ノ森氏は仮面ライダーの漫画連載で「お前たちショッカーの地球征服という野望を打ち砕き、人類の平和を守るため……大自然がつかわした正義の戦士仮面ライダー」というセリフを仮面ライダーに語らせている。ショッカーはその科学技術力によって自然と人間を支配しようとする悪の組織であるが、それに反乱を起こすのが、仮面ライダーなのである。その意味では、仮面ライダーは、近代科学が自然に勝利したとおもわれたその瞬間に人間の科学文明に反乱を開始するゴジラにも似たところがある。(一方は等身大ヒーローもう一方は巨大モンスターという違いはあるが。)

啓蒙が神話となり、文明が野蛮となる『啓蒙の弁証法』(1944)の局面は、「自然の反乱」と特徴づけられるだろう。

1993 年に行われた『仮面ライダー22 年の歴史』というインタビューで石ノ森章太郎は、

仮面ライダーは、インパクトの強い作品にしたかった。もともとは、スカルマンという骸骨のヒーローを考えていた。気持ち悪いのがねらいだったんだ。でもスポンサーから OK がでない。そこで昆虫のバッタが、骸骨に似ているということでそれを採用したわけ。

世の中が景気良くなってきて都会から暗闇がなくなってきた。闇がなくなると想像力がなくなるんだな。キレイキレイになり過ぎた世の中で毒のあるヒーロー、暗い部分を取り出して暗くても正義を守るヒーローを出したかったんだね。

ショッカーというのは、文明の名のもとにいろいろなものを破壊する組織、自然環境や人間の精神を破壊する公害を引き起こす会社や企業というものをイメージしたものです。

30 分番組では、うまくそのようなテーマを盛り込むことは、難しいですが、僕のころのなかには常にこだわりがありました。

つまり、ここにおいて石ノ森章太郎は、仮面ライダーで意識していたのは、企業による公害問題、破壊されていく自然、社会から失われていく人間の想像力をかきたてる闇といったテーマだったと語っているのである。

仮面ライダーは、開始当初の企画では、仮面天使やクロスファイアーやスカルマンといっ

た黄金バットのような不気味な仮面をかぶったヒーローとして構想されていたことは、記憶されてよいだろう。ヒーローというには、あまりにもデザインが不気味だったためスポンサーが拒否反応を示し、締切の時間が刻々と近づく中で息子の意見を聞きながらなんとか企画を通したのが、バットをモデルにした仮面ライダーのデザインであった。

だから、仮面ライダーは、どこか不気味なところを残しているモンスター的なヒーローである。それは悪の組織ショッカーのテクノロジーが身体に刻み込まれていることと無関係ではない。

また、仮面ライダーの見どころのひとつをバイクアクションにするにあたっては、毎日放送のディレクターであった広瀬隆一が大きな役割をはたしたという。

広瀬は、かつて満州に日本兵として動員され日本陸軍のバイクである陸王に満州で乗っていたという。そのことが一つのヒントとなり、仮面ライダーのバイクアクションがメインに押し出されることになる。満州に行っていた人間が、関与したという意味でも仮面ライダーとゴジラは共通性を持っている。また東映という映画会社は満州から引き揚げてきた映画人が作ったことでも知られる。

3. 日本政府とショッカー

漫画版『仮面ライダー』第二巻では、日の下電子という会社が、登場し、仮面ライダー二号の一文字隼人とFBIの捜査員、滝和也が、以下のような会話を交わす場面が存在する。

一文字隼人「日の下電子は五年ほど前に日本政府から極秘にある注文を受けた。そいつを知っているのは閣僚のごく一部だけ。国民は何にも知らされていない。」

滝和也「日本政府から極秘の注文？なんだそいつは。」

一文字隼人「巨大な電子頭脳、これまでの調査でわかっただけでも頭脳の心臓部だけでも一キロ四方というとても巨大さだ。」

滝和也「日本政府は一体それを何に使うつもりだろう。」(338頁)

石ノ森章太郎『仮面ライダー』(秋田書店2014)

ここでは巨大電子頭脳が、テレビや腕時計から電波を発し、人々を思いのままに操るという設定がなされていた。ショッカーは、日本政府と結びついて巨大電子頭脳による人間の支配や管理そして操作を行おうとしていたのである。仮面ライダーには日本政府による国民総背番号制などをいち早く批判的にとらえる視点が存在していたのだった。

岡謙二は、『不滅のヒーロー仮面ライダー伝説』(ソニーマガジンズ,1999)においてショッカーについて次のように述べている。

悪の軍団の命令系統は、完全な上意下達であり、絶対服従の組織である。

そこでは権力を持つものに次の権力を持つものが服従し、さらにその次に、というように完全な縦社会を形作っているのは明白だ。

しかも、彼らは自分たちの味方さえ信じることはなく、ただ自分がどうすれば権力を握れるかだけを考え、そのためには味方さえ裏切ることがある。

うがった見方をすれば、それは、当時エコノミックアニマルとさえ呼ばれた企業に自分の存在を服従させることによってのみ生きることを実感できた企業戦士の姿や汚職や権力欲にまみれた政治家や官僚たちの姿にだぶらせることもできるだろう。(277 頁)

「奴隷の主人もまた奴隷である。」こう喝破したのは、魯迅だったが、石ノ森章太郎は、会社国家ニッポンの問題点や汚職政治家や忖度官僚の問題点をもショッカーという悪の組織に集約させていたようにも思えてくる。

4. 悪の組織ショッカーというネーミングの先駆性

カナダのジャーナリスト、ナオミ・クラインは、2007 年に『ショックドクトリン』を発表した。ショックドクトリンとは、ナオミ・クラインによれば大惨事に付け込んで実施された過激な市場原理主義的改革のことである。

アメリカ政府とグローバル資本は、戦争や津波、ハリケーンなどの自然災害などの危機に付け込んで、あるいは意識的にそれらを招き入れ、人々がそのショックから目覚める前に不可能と思われる過激な経済改革を強行する。

ショックドクトリンの源は、ケインズ主義に反対して徹底した市場原理主義、規制緩和、民営化を主張したアメリカの経済学者でシカゴ学派のミルトン・フリードマンであり、経済の過激な荒治療の発想には個人の精神を破壊して言いなりにさせる 1950 年代以降のアメリカ CIA による拷問手法「ショック療法」が、重なるとされる。

1970 年代以降の世界の様々な出来事を見れば、これまでアメリカを中心とした自由主義市場の巨大な勢力が、巨額の資金力を使い世界を意のままに操り、支配してきたかがわかるという。ナオミ・クラインによれば、ショックドクトリンのはじまりは、1970 年代チリのアジェンデ政権に対してピノチェト将軍が、行ったクーデターであるという。

シカゴ学派は、「大きな政府」や「福祉国家」を盛んに攻撃し、国家の役割は警察と契約強制のみであとはすべて市場にゆだねよと説いた。だがチリの民衆からはこれらの政策は拒絶された。チリでは無実の市民の逮捕、拷問、処刑があいつぐだけでなく「惨事便乗型資本主義」によって「小さな政府」主義が蔓延し、公共部門の民営化、福祉、教育、医療などの社会的支出の削減が断行され、多くの市民が窮地に追い込まれていた。

アジェンデは、1908 年に移民の子として生まれ、医者となっていたが、その後、政界に身を投じる。1952 年、1958 年、1964 年の大統領選に出馬したがいずれも敗北していた。

とくにアメリカの CIA は、アジェンデを鬼として描く、プロパガンダを展開し、アジェ

ンデの対立陣営である「進歩のためのチリ同盟」を支援していた。

しかし、1970年の大統領選では、アジェンデは労働者の男性を中心に支持を伸ばし、世界史上初の自由選挙による社会主義政権の誕生となった。

アジェンデは、1970年に大統領に就任し、1973年9月11日にクーデターによって殺害されている。これは2001年9月11日とともに「もうひとつの9.11」として記憶されるべきものである。この背後で動いていたのが、CIAやミルトン・フリードマンの教えを受けていたシカゴ学派の経済学者やグローバル資本であった。

日本ではまさに『仮面ライダー』が、開始された時期とほぼ一致している。

これらはまさにショックを与える者たち、ショックに便乗して自然や人間を支配し破壊する者たち、すなわちショッカーではないだろうか。

石ノ森章太郎が、ナオミ・クラインの『ショックドクトリン』を知っていたとは思われないが、広範な読書によってこうした動きには、気が付いていたのではないだろうか。

チリのクーデター以降も天安門事件(1989)、ソ連崩壊(1991)アメリカ同時多発テロ(2001)、イラク戦争(2003)、スマトラ島沖地震(2004)による津波被害、ハリケーンカトリナ(2005)といった政変、戦争、災害などの危機的状態をあげ、惨事便乗型資本主義は、これらに付け込んで人々がショック状態から自分を取り戻す前に過激なまでの市場原理主義を導入し経済改革や利益追求に猛進してきた。

こうしたことから考えて、石ノ森章太郎によるショッカーというネーミングも非常に先駆的なものと評価されるべきだろう。人間の自由を守る仮面ライダーは、新自由主義的企业やそれを擁護する経済学者とも戦うであろう。

5. 仮面ライダーとしての市民科学者、小出裕章、高木仁三郎

たとえば、東大教授の安富歩は、『東大話法と原発危機—傍観者の論理、欺瞞の言語』(明石書店,2011)のなかで以下のような興味深い指摘を行っている。

そもそも、原発を作って爆発させ、日本中に放射能をばらまくなどという作業は、おとぎ話の悪者集団そのままです。私が一番びったりくるのは「仮面ライダー」の悪の組織ショッカーです。「原子カムラ」は比喩的な意味ではなく現実「ショッカー」だというべきかもしれません。ここを見誤ると世界の像は完全に歪んでしまい、世の中は「大人の世界」になってしまいます。(87頁)

仮面ライダー小出裕章も改造人間です。原子力村、ショッカーが大学や大学院でいろいろ教え込んで小出さんを改造したのですから。仮面ライダー本郷猛が、精神まで改造される前に逃げ出し、ショッカーによって改造された身体を武器に闘っているのと同じように小出さんは、大学や大学院で改造された頭脳を武器に戦っています。仮面ライダーが孤独で、わ

ずかの仲間とともに人間の自由のためにショッカーと闘っているのと同じように小出さんはわずかの仲間とともに人間の自由のために原子カムラと戦っています。小出さんもライダーもショッカーの原子カムラが次々に繰り出してくる「怪人」と闘い続けていますが、決して傷つかず倒れません。(88 頁)

「原子カムラ」が、次々に繰り出してくる「怪人」とは、「にこにこしている人のところには、放射能は来ません。」と語った“学者”などをさすのだろう。

また安富はこうも言う。

石森章太郎は、「世界がショッカーに支配されかかっており、人間の自由を守るには、ひとりひとりが仮面ライダーになって戦い続けるしかない!」という驚くべき真実を当時のこどもたちに伝えようとしていたのだと私は考えています。(88 頁)

安富氏は、高木仁三郎や小出裕章ら市民科学者のなかに仮面ライダーの要素を見出しているが、これは仮面ライダーという物語が、現代社会においてどのような意味を持つかを考えるときに最も示唆的な言葉の一つであると私は思う。また 2015 年 11 月、北京に経済評論家、佐高信さんを迎え夫人も交えて食事をしていた時、佐高夫人が、「3.11 で唯一救いだったのは、小出さんのような人に光が当たったことだ。」と発言したことがなぜか忘れられない。

石ノ森章太郎氏は、仮面ライダー1号である青年科学者、本郷猛を演じた藤岡弘に「子供向けだけどしっかりやってくれよ。」といったというが、石ノ森章太郎は、「世界がショッカーに支配されかかっており、人間の自由を守るには、ひとりひとりが仮面ライダーになって戦い続けるしかない!」という真実を当時のこどもたちに伝えようとしていたとするならば、これは、より説得力のある言葉となるだろう。

こうしてみるならショッカーとは、政府、電力会社、メディア、大学、多国籍企業、国際金融資本など産・官・学・財・メディアの癒着によってできた「原子カムラ」に近いものということになるのだろう。

高木仁三郎や小出裕章は、もともとはそこに所属していたが、その後ショッカーに対して反乱を起こし、批判を行うようになった。

高木仁三郎には電力会社の監視が、四六時中ついており、誰も頼んだ覚えがない寿司が届くというようないやがらせも日常茶飯事だったと高木仁三郎の妻は語っている。

仮面ライダーとは、企業による公害問題、原発の問題さらには国際金融資本による自然と人間の支配を意識した「人間にとって自由とは何か」「人間の解放とは何か」を問う哲学的な物語なのである。

6. 東北人としての石ノ森章太郎

2011年3月11日の東日本大震災に伴う津波によって石巻にある石ノ森章太郎記念館は、大きな被害をこうむった。(2011年3月11日、東京電力の勝俣会長は、北京にいた。)

私が、2012年に訪問したときは、まだ復旧作業がなされている途中で再開はなされていなかった。石ノ森章太郎記念館は、川辺にあった。近くの民家でそのまま放置され、誰も住んでいない家もいくつかあった。

なぜ、石ノ森章太郎記念館が、石巻にあるかといえば、石ノ森章太郎氏が、宮城県登米郡石森町生まれであり、その近くの都市ということで石巻が選ばれたからである。

石ノ森氏は、東京電力の原子力発電所によるもっとも大きな被害をこうむった東北地方出身の東北人であった。

私は、先に仮面ライダーとゴジラの共通性を指摘したが、『ゴジラ』(1954)の制作において中心的な役割を果たしたのも東北人であった。

石ノ森章太郎の故郷、石森町(現在の中田町)の空は透き通るような青空があり、星々が落ちてくるかと思えるような夜空があった。小川には透明な水が流れ、そこではドジョウやフナやゲンゴロウやタガメが、水草の間を泳ぎ、夏にはホタルが飛び交っていた。

だが、それらの豊かな自然がいつの間にか消え去ってしまっていたことに石ノ森章太郎は気が付いていた。

『ゴジラ』(1954)には、監督の本多猪四郎氏(山形県)、特撮監督の円谷英二氏(福島県)、ゴジラの中に入っていたスーツアクターの中島春雄氏(山形県)、主演の宝田明氏(ハルピンから引き揚げ、新潟県)など多くの東北人が関わっていた。石森章太郎氏が、仮面ライダーという痛みを背負った孤高のヒーローの物語を生み出したのは、彼が東北人だったということとも無関係ではないはずである。

7. 石ノ森章太郎の中国での受容

日本特撮党党首を名乗る読売新聞記者の鈴木美潮は、『昭和特撮文化概論—ヒーローたちの戦いは報われたか』(集英社2015)において日本の対外文化政策である「クールジャパン」について以下のように述べる。

「クールジャパン」が語られるときに出てくる言葉が、「コンテンツビジネス」とか「キャラクタービジネス」と「商売」のオンパレードだからだ。経済産業省主導だから仕方ないのかもしれないが、そこに愛が全く感じられないこともしばしばだ。

特撮やアニメの「価値」をビジネスの尺度でだけ測っていては、肝心なことを見失う。

「クールジャパン」として特撮(アニメや漫画やアニソン)を海外に売り出すことの本当の意味は、薄っぺらなビジネスにあるのではない。そんなものならそれぞれの企業に任せてお

けばよい。

日本のコンテンツを海外に展開することの最大の利点は、日本のヒーローに共感してもらうことで、日本を理解してもらうことにある。日本の文化を知ってもらい、日本人の考え方をわかってもらう。そのうえで、日本のヒーローが訴えてきたことに共感してもらう。幅広く日本への親近感を持ってもらうことこそ、他のビジネスではできず、こうしたコンテンツが成し遂げえることであり、国がクールジャパンを推進すべき理由だと筆者は思う。

(214 頁)

実は私もまったく同じことを北京で感じていた。

特に日本の仮想敵国とされる中国において「日本の文化を知ってもらい、日本人の考え方をわかってもらう。そのうえで、日本のヒーローが訴えてきたことに共感してもらう。」ことが重要だと考えてきた。

石ノ森章太郎の中国でのヒーロー番組の受容に関していえば、まずは『仮面ライダー』である。80 後、90 後(80 年代、90 年代生まれの意味)の若い世代は、平成の仮面ライダーを見て育っている。私は、北京の民間の日本語学校で日本文化紹介として「仮面ライダー」の授業を行ったことがある。「仮面ライダー」第一話を参加者で見て解説を加え、その後、共同討論するという試みであった。そのとき参加者のひとり王越は、以下のような感想を寄せた。

今回の授業に参加する前に友たちと平成ライダーと昭和ライダーについて話しました。私たちが、平成ライダーを見る原因は好きな俳優さんが出演していたり、好きな声優さんが声を当てていたりしたためでしたが、どうやら本当に仮面ライダーが好きな人間にとっては平成ライダーより昭和ライダーははるかに素晴らしい作品のようです。先生の授業を受けて、その方々が、昭和ライダーを愛する原因が、少し分かり始めたような気がします。独特な世界観、深い意味のある各キャラクター、本当に魅力的です。少し大袈裟な言い方かもしれないが、石森章太郎さんは自分の筆で「悪」と戦っているんだろうと思いました。

こう書いた王越の母が好きな石ノ森作品は、『燃えろアタック』(1980)というバレーボールを扱った作品である。2008 年の北京オリンピックの頃、北京大学ちかくの成府路でバスに乗っていた私は、突然、『燃えろアタック』(1980)の主題歌がバスの中で流れて驚いたことがある。日本でそれほどヒットしたわけでもないマイナーな作品である『燃えろアタック』がなぜこのバスの中でと驚いたのであった。

その謎が解けるのは、劉文兵『中国 10 億人の日本映画熱愛史－高倉健、山口百恵からキムタク、アニメまで』(集英社新書 2006)を読んだ時であった。

この本によれば、中国のバレーボールチームを応援するためのドラマとして『燃えろアタック』(1980)が大人気となり、視聴率 80%まで行ったというのだ。

主演の荒木由美子は、中国のテレビ番組に呼ばれているほどの人気だったという。

8. 「大きな物語」の終焉？リトル・ピープルの時代？

批評家の宇野常寛は、『リトル・ピープルの時代』（幻冬舎 2011）において村上春樹の文学作品『IQ84』に依拠しつつ現代は「ビックブラザーからリトル・ピープルの時代」に移行したと論じている。

ビックブラザーとは、ジョージオーウェルが『1984』で描いた独裁権力（国家権力）（＝超越者）をイメージしている。そこにおける戦争は、国民国家愛の総力戦であり、悪はファシズムやスターリニズムを意味し、国際秩序は冷戦の時代であり、ヒーロー番組としては初代ウルトラマンが、ビックブラザーの時代のヒーローである。宇野によれば、これが 1968 年までの時代の特徴なのだという。

一方、ビックブラザーの解体期は、1968 年から 1995 年の冷戦からグローバリゼーションの時代であり、ここでビックブラザーからリトル・ピープルへの移行が生じたとする。

戦争としては冷戦下の代理戦争であり、連合赤軍やオウム真理教が、悪のイメージでありヒーローとしては、第二期のウルトラマンすなわち「帰ってきたウルトラマン」であり、昭和の仮面ライダーである。

リトル・ピープルの時代においては、人々は歴史から切り離され信じるべき「大きな物語」も終焉していると宇野はいう。

さらに宇野は『リトル・ピープルの時代』（幻冬舎,2011）のなかで言う。

その骨がらみの政治性ゆえにハードな SF ドラマとしての展開を余儀なくされた、『ウルトラマン』とは対照的に『仮面ライダー』は、文字通りの痛快娯楽劇として送り出されることになったのだった。

ビックブラザーがゆっくりと懷死を始めていった時代が求めていたのは、まずはデタッチメント≡非政治化だったのだ。（188 頁）

また、宇野はこうもいう。

「内在的、リトル・ピープルのヒーローである仮面ライダーは、「政治の時代の終わり」に出現し、そして徹底してその世界から政治性をひいては物語性を排除した。政治の時代と同時にヒーローの政治性も消失したのだ。」（190 頁）

その根拠として宇野は『仮面ライダー』プロデューサーの平山享の次の言葉を挙げている。

丸の内東映でもない、新宿東映でもない、浅草東映の子供たちを見据えてつくった娯楽時

代劇。テレビの観客はまさに浅草東映のお客さんそのものだったのだ。浅草東映のお客さんは、働きづめに働いて、ストレス解消の娯楽を求めて映画を見るのだ。そういう時は、東映時代劇調が最高なのだ。それだったら自信がある。そういう意味でだったら、確かに世界一といってもよいほどのノウハウを持っている。これなら自信をもって教えてあげることができると思った。

平山亨『仮面ライダー名人列伝』（風塵社 1998）

なるほどこれは一面においては真実であろう。

『ウルトラマン』製作の円谷英二が、戦前の東宝の戦争映画を手掛け、沖縄出身の金城哲夫が、政治性のある脚本を書いたのに対し、『仮面ライダー』製作の東映は、チャンバラ映画が起源で、伊上勝らの非政治的で娯楽的な脚本が、主流になっていった。

商業的な要請で本郷猛の一号ライダーのシリアス路線は、一文字隼人の2号ライダーの明るい路線へと変化した。

しかし、だからといってこれを即座に「大きな物語」の終焉ととらえるのは早計であり、宇野の展開しているのは、ポストモダンの仮面ライダー論ではないか。

たとえば、一方で鈴木美潮は、『昭和特撮文化概論—ヒーローたちの戦いは報われたか』（集英社 2015）で平山が『仮面ライダー』について、「かつて「労働者の味方としてつくった」と語ったことがある。当時しきりに叫ばれていたのが、「生産性の向上」という言葉。会社の幹部がしきりに強調するその言葉に平山は反発を覚えたという。

「だって生産性の向上って連れてきたやつを死ぬまで働かせるように聞こえた。それじゃショッカーと同じじゃない。やらせる方（資本家）はいいけどやらされる方（労働者）はたまりませんよ。」と語っていたという。（55頁）

という証言をしている。

つまり、仮面ライダー製作者の平山亨は、仮面ライダーに娯楽劇の要素を取り入れると同時に抑圧された労働者のために働く仮面ライダーという要素も入れ込んでいたのだ。

また、政治性のない脚本を書くことされる伊上勝だが、『仮面ライダーV3』（1973）において悪の組織デストロンを裏切った科学者、結城丈二、ライダーマンとV3の緊迫した物語性のある脚本も書いていた。

本稿であつかった『仮面ライダー』における『啓蒙の弁証法』（1944）の問題、すなわち啓蒙による人間と自然の支配という問題もまだ全く解決はしておらず、『ショックドクトリン』（2007）におけるグローバル資本や多国籍企業の国際政治への介入といった問題もまったく解決はされていない。会社国家ニッポンの問題も依然として続いている。安富歩は、高木仁三郎や小出裕章らの市民科学者を仮面ライダーにたとえたが、これは現実を踏まえての発言である。ショッカーは、特撮ドラマの中にだけ存在するのではなく、現実の世界に存在し

ているのだ。

こうした大きな問題が、存在する限り市民科学にとっての仮面ライダーの意味が、失われることはないだろう。

石ノ森章太郎は、「常に私の心の中にはこだわりがありました。」と 1993 年のインタビューで語っているが、そのこだわりに私の授業に参加した中国人は、反応している。

おわりに

私は、かつて「葦牙ジャーナル」という雑誌の『「怪物の時代」におけるゴジラと石原慎太郎』(2002)という論考においてゴジラと石原慎太郎を対極的な存在にとらえ、「その闘いは、まだまだ終わらない。」と書いたことがある。

石原慎太郎氏と石ノ森章太郎氏は、それぞれ 1934 年生まれ、1938 年生まれの同世代の作家である。

名前は、非常に似ているのだが、そのそれぞれの存在は、対極的なものであるといっていよい。石原慎太郎氏は、ショッカーに近く、石ノ森章太郎氏は、ゴジラや仮面ライダーに近いのだ。「ゴジラと石原慎太郎の闘い」や「仮面ライダーとショッカーの闘い」が終わらないのと同様に「石原慎太郎的なもの」と「石ノ森章太郎的なもの」との闘いは今後も続いていくであろう。

仮面ライダーは 3・11 以降、現実における「ショッカー」の存在がより明確になったこともあり、その存在はさらに重要なものになっている。

石ノ森章太郎は、日本が世界に誇る世界的な漫画家として記憶されることになるだろう。仮面ライダーとは市民科学にとってのひとつの希望である。

注：本稿は『葦牙ジャーナル』に発表した「仮面ライダーとは何か」を大幅に加筆修正したものであることをお断りさせていただきます。

市民科学研究所の活動は皆様からのご支援で成り立っています。『市民研通信』の記事論文の執筆や発行も同様です。もしこの記事や論文を興味深いと感じていただければ、ぜひ以下のサイトからワンコイン（100 円）でのカンパをお願いします。小さな力が集まって世の中を変えていく確かな力となる—そんな営みの一歩だと思っていただければありがたいです。

[ワンコインカンパ](#) ← ここをクリック（市民研の paypal 支払いサイトに繋がります）